

諏訪湖のことをもっと知ろう

諏訪湖の鳥、周辺の鳥



ヨシ原から飛び立つヨシゴイ



赤砂崎に来たセイタカシギ



浜に上がったコハクチョウの群れ

令和7年3月
諏訪湖クラブ
長野県地域発元気づくり支援金事業

あいさつ

諏訪湖クラブ会長 沖野 外輝夫

湖の、生態系にとって鳥類は微妙な存在です。当然、諏訪湖にとっても同様です。何故ならば、生態系の概念は対象とする自然、例えば諏訪湖をその流域も含めて閉鎖系として考え、諏訪湖を含む諏訪湖流域全体を一時的に一つの閉鎖系として物質が循環していると仮定しているからです。現実には一年中流域内で生活する留鳥も居ますが、他の地域と渡りを繰り返す渡り鳥が存在します。当冊子で紹介する鳥たちもその多くは渡り鳥です。この冊子にも紹介されているオオワシは猛禽類で、生物群集の頂点に位置する動物ですが諏訪湖の生態系にとっての位置づけは分かっていません。

渡りをするカモ類、白鳥なども同じです。人間社会での地域における観光客に相当するのかもしれない。そこで、未解明な部分には目をつむって、諏訪湖とその周辺で見られる鳥類の要略について紹介しています。

諏訪湖の鳥類研究では元信州大学教育学部教授の羽田健三氏が飛来する水鳥の食性を含めて研究し、魚類への影響などを考察していますが、その後は日本野鳥の会諏訪支部のメンバーによる、諏訪湖へ飛来する水鳥の個体数調査、諏訪湖浄化に必要な下水道終末処理場の建設用地として埋め立てられた「渋のエゴ」に関する諏訪市教育委員会の調査団による調査報告、近年の白鳥飛来後は諏訪湖白鳥の会による飛来数調査などが続けられています。本冊子で紹介されている「塩嶺小鳥バス」は地元在住の野鳥研究者、小平万栄氏の発案で始められた人気の探鳥会です。

諏訪湖クラブでは先に「散歩しながら諏訪湖に学ぶ」の冊子を出版しました。内容は諏訪湖に係わる自然、水質、生物、治水、保全対策、文化など、総合的な冊子でした。今回制作したこの冊子、諏訪湖のことをもっと知ろう、「諏訪湖の鳥、周辺の鳥」は、諏訪湖や周辺に生息する鳥類の特徴を解説するだけではなく、巣箱や餌台の製作、鳥類の観察方法も紹介しています。少しでも鳥とふれあい親しみを感じていただく一助となることを期待しています。

最後になりましたが、本冊子作製に当たっては、長野県の「地域発 元気づくり支援金」の交付をはじめ、多くの皆様のご協力を頂きましたことに対して、深く感謝申し上げます。

目次

あいさつ・目次	… p 1
諏訪の空をトキが飛んでいた頃	… p 2
諏訪湖にくる様々な鳥たち	… p 3
「渋のエゴ」の自然と鳥	… p 4
豊かな自然環境の姿とは	… p 5
四季をとおして観察できる留鳥たち	… p 7
南の国から渡ってきた夏鳥たち	… p 13
北の国から渡ってきた冬鳥たち	… p 16
諏訪湖を中継地とする旅鳥たち	… p 20
今なお愛されている塩嶺小鳥バス	… p 23
野鳥を観察に出かけよう	… p 24
身近な環境に巣箱を掛けよう	… p 25
餌台の作り方とその心得	… p 26
参考文献	… p 27

■ 諏訪の空をトキが飛んでいた頃

平安時代にいた僧侶^{そうりよ}の西行という人は、武士であり歌を詠^よむ人でもありました。諏訪湖でカモが群れになって飛ぶ光景を見て「あぢむら(カモの群れのこと)わたる諏訪の水海」という和歌をつくりました。そんな湖に集まる水鳥を、諏訪のお殿様は大事な決め事の一つとして「水鳥札」のルールをつくり捕^とってはならない「御停止之鳥」(おちょうじのとり)を定めました。その鳥とはツル、コウノトリ、トキ、アオサギ、ダイサギ、コサギ、ゴイサギ、ハクチョウ、バン、他でこれは諏訪藩の資料に残されています。以上の鳥のうち、いま絶滅寸前^{ぜつめつすんぜん}にあるトキは、明治の初めころまで諏訪の空を飛んでいたと考えられています。

残念ながら、日本にいたトキは全部いなくなりましたが、中国には少し残っていて人の飼育によって増えていました。その中国のトキを借りて、新潟県の佐渡島で大切に育てました。そして、少しずつ自然の中に帰してあげたところ、トキたちは自分たちで子育てができるようになりました。

朱鷺(トキ)の歴史

- 1981年 国内トキ全鳥捕獲^{ほかく}(5羽)
同年 中国でトキ再発見
- 1989年 中国から1羽借用
- 1999年 日本でも人工繁殖に成功
国内4羽
- 2003年 日本産トキ絶滅 国内39羽
- 2008年 国内112羽に
一部佐渡島で放鳥開始
- 2012年 国内182羽に増える
- 2022年 野生下で537羽に増える
- 2026年 本州で初、能登で放鳥へ

トキ(トキ科)



全長80cm位、翼開長130cm位。
春から夏にかけての繁殖期は高木の巣で子育てをする。主な餌は水辺や湿地にいるドジョウやカエル、昆虫など。

諏訪湖^{じゅうりょう}の銃^{じゅうりょう}が禁止

昭和52年(1977)のこと、野鳥を観察し守っている日本野鳥の会諏訪支部が「諏訪湖で銃^{じゅうりょう}はやめましょう」と活動をはじめました。諏訪湖にハクチョウが飛来していたので「ここを白鳥の湖に」と呼びかけたのです。昭和59年(1984)には、県や地元の市や町の議会に陳情をしました。鳥の影響をうける漁師や農家の人たちとの話し合いが続き、十年もの間に少しずつ理解が深められました。その結果平成7年(1995)に「今後は諏訪湖で銃^{じゅうりょう}ができません」とした県による決まりができました。

■ 諏訪湖にくる様々な鳥たち

諏訪湖には多くの種類の水鳥が飛来します。ひと口に水鳥といってもその生き方は様々で、カモの仲間のハクチョウは長い期間を他の水鳥にはない強い家族愛で結ばれています。餌も多様で魚や貝を食べるカモ、植物だけ食べるカモ、プランクトンを食べるカモなどです。卵を温める間だけの巣も地上から高い木の穴の中まであります。ほかの水鳥も同様に浅瀬で長い足と首を使って餌とりするサギの仲間、砂や泥地が餌場であるシギやチドリの仲間。陸には上がらずに一生の大半を水上ですごすカイツブリの仲間など、みんなユニークな生き方をしています。非常に長い時間のなかで、鳥たちは自分にあった生き方を身につけました。

鳥の^{くちばし}嘴は、捕食の道具だけでなく、羽づくろい、求愛道具、ヒナの養育など様々な役割を果たしています。諏訪湖では近年増加した^{ぎょしょくせい}魚食性のカワアイサが湖の魚を食べるとして、問題視されていますが、その嘴はカモ科とは思えない形状です。また、水が^{ひた}浸る赤砂崎に降り立ったハウロクシギは湿地保全を訴えるかの嘴です。

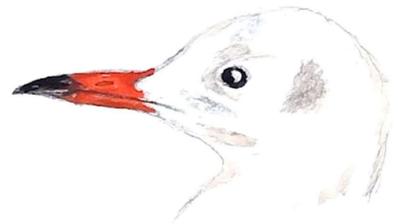
諏訪湖で見られる鳥の嘴を紹介します。

・アオサギ (サギ科)



大型のサギで嘴の長さは12cm位。かみ合わせは^{かみそり}剃刀のように鋭くドジョウのような滑る魚も逃がしません。

・ユリカモメ (カモメ科)



飛びながら水面の餌を拾って空中で食べたり、水面でついでむのに適した嘴をもっています。

・カワアイサ (カモ科)



カモ科では変わった嘴で、かみ合わせはギザギザな鋸状。水中で魚を捕えるのに適した道具となっています。

・ハウロクシギ (シギ科)



細い嘴は20cmもありシギ科では最長。細い嘴を泥の中に差しこみカニなどを捕え、足をもいで体だけを食べます。

・カワウ (ウ科)



ウ科の嘴の特徴は、先が鋭く下に曲っていることです。餌の魚を捕まえたとき、この曲がり方が魚に食い込み逃がしません。

「^{しぶ}渋のエゴ」の自然と鳥



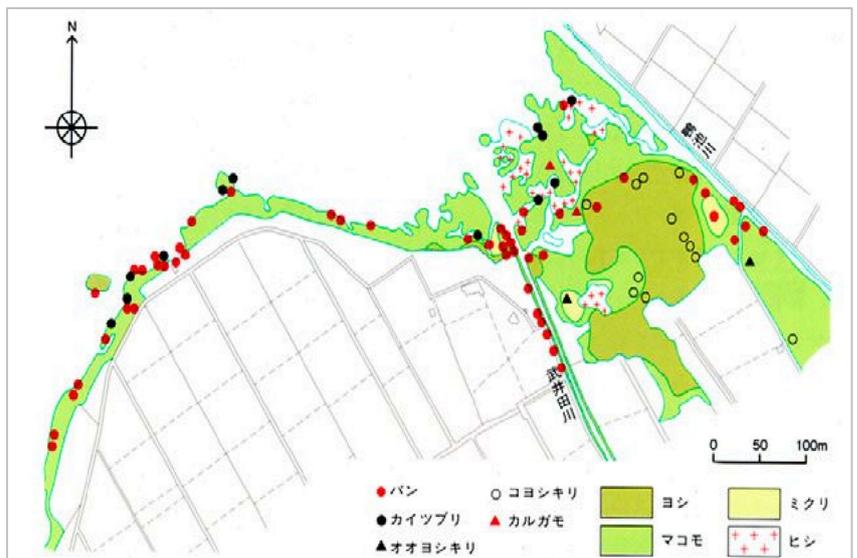
諏訪湖の岸には昭和の時代まで高浜、泉沢、渋の3つのエゴ（入り江という意味）がありました。そのうち最も大きなエゴが諏訪市豊田の「渋のエゴ」でした。入り江の幅は300m、陸がわに600mも伸び、そこは原始の諏訪湖岸を思わせる風景が広がっていました。豊富な水生植物とそこに群れる水鳥は、生きものの楽園となっていました。後にこの場所は、諏訪湖を浄化するための下水道終末処理場施設（クリーンレイク諏訪）が造られたため、エゴは埋め立てられ今はありません。渋のエゴが消えたのは昭和51年(1976)で、この自然を記録に残そうと諏訪市教育委員会が総合的な調査を行い、日本野鳥の会諏訪支部でも鳥類について埋め立て前3年間の調べを行い、共に報告書を残しました。その結果、鳥類についてはシギとチドリ科だけで33種類が記録されています。これは山国の信州ではたいへん珍しく貴重な記録となりました。さらに野鳥の会は昭和60年(1985)から2年間を調べたところ、シギやチドリが12種類と大幅に減少していました。現在ではエゴがあった付近の湖岸はシギやチドリの姿はほとんどなく、水面で葉を広げるヒシが群落をなし、この葉を好んで食べるオオバンが増えています。秋の初めころ、多い時は1,000羽以上もオオバンが集まり、一部が初夏に繁殖^{はんしよく}しています。



渋のエゴに生育するコウボネ



昭和期にいたコヨシキリ



渋のエゴに出現した鳥の営巣と植生
調査；諏訪市教育委員会（昭和47年3月）

豊かな自然環境の姿とは

○沈水植物帯（水の中に沈んでいる）

- ・植物：エビモ、センニンモ、クロモ、セキショウモなど
- ・鳥類：カンムリカイツブリ、ホシハジロ、ユリカモメ、アジサシなど

○浮葉植物帯（水面で葉を広げる）

- ・植物：ヒシ、アサザ、ヒルムシロなど
- ・鳥類：カイツブリ、カルガモ、ヨシゴイ、オオバンなど



ホオジロガモ



オカヨシガモ



アカエリヒレアシシギ

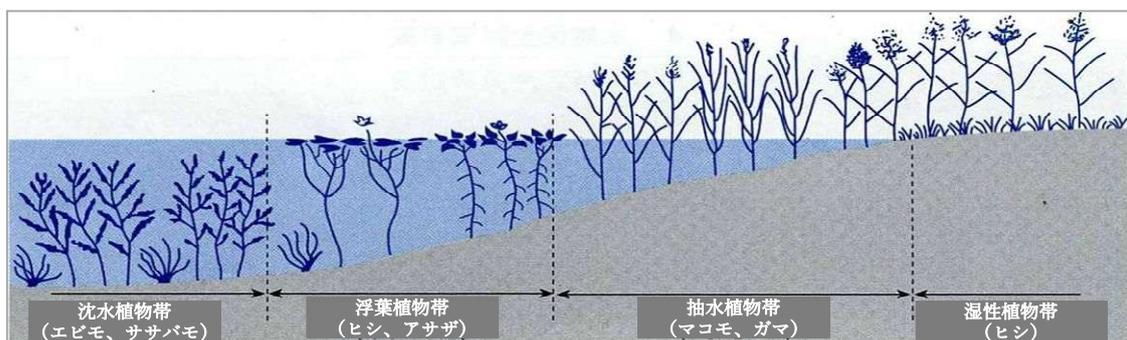
豊かな自然環境の姿とは

○抽水植物帯 (水上に茎をのぼす)
ちゅうすい

- ・植物：ガマ、マコモ、ミクリ、コウホネなど
- ・鳥類：カイツブリ、オオバン、アオサギ、ヨシゴイ

○湿性植物帯 (湿った場所を好む)

- ・植物：ヨシ、カワヤナギ、オギなど
- ・鳥類：オオヨシキリ、ヨシゴイ、ササゴイ・以上は繁殖



陸地（右側）から湖中に向けた水生植物の分布

■ 四季を通して湖周辺で観察できる留鳥たち

諏訪湖とその周辺には近年だけで 140 種類もの鳥が観察されています。そのうちおよそ 100 種類は、はるばる外国からやってきた鳥たちです。季節による主な行動から「留鳥」「夏鳥」「冬鳥」「旅鳥」にわけて以下紹介します。

○留鳥とは

一年を通して余り移動しない鳥を「留鳥」といいます。諏訪湖には多くのカモが飛来しますが、年中いるのはカルガモ 1 種類にしぼられます、それ以外の留鳥はオオバン、カイツブリなど 20 種類ほど。その中にはハシボソガラスやセグロセキレイなど陸の鳥も年間とおして湖岸を利用しています。なお怪我で帰れないカモなどは留鳥とはなりません。

カイツブリ (カイツブリ科)



全長 26 cm 位。体は小さく卵のような姿で水に潜るのが得意です。氷が張らない湖や川では年中見かけます。足の指には水かき用のヒレがあるので、水中で小魚やエビ、水棲昆虫などを捕えて食べます。危険を感じるとすぐ潜り、離れた所に浮かび上がります。浮き巣で卵を温めますが、巣を離れるときは卵に草をかぶせて守ります。

カルガモ (カモ科)



全長 58 cm 位。オスとメスは同じ色で見分け難いですが、くちばしの先が黄色いので、ほかのカモ（とくに雌）との区別は容易です。湖や川、田んぼの周辺で生活して、草の実や葉、水生昆虫、タニシなどを食べます。都会の公園などでも繁殖し、道を横切る親子の安全を守るため、交通整理をしている光景がニュースになります。



鳥のひみつ-① 環境に反映されている卵の色や模様

卵の色は種類によって環境に溶けこんだ色の卵を産む鳥がいます。コチドリがその例で、巣らしい巣を作らないコチドリは、小石まじりの地面で石ころと間違えるような色や模様の卵です。迷彩模様が強い。



地面に同化した
チドリの卵

オオバン (クイナ科)



全長 36 cm位。嘴の上が白いほかは、ずんぐりした黒い体です。昭和の中ごろまで諏訪湖ではほとんど見なかった鳥ですが、近年は急に増えました。諏訪湖や上川などから陸に上がり、道路のわきで盛んに草を食べる群れを見かけます。歩きが得意のほか、指のヒレを使って泳ぎも上手です。

キジバト (ハト科)



全長 30cm 位。オスとメスは同じ色で、羽のうろこ模様がキジの雌に似ていることが名前の由来とされています。餌は植物食だけで、雑こく類のほか、サンショウなど木の実も食べます。産卵は決まって2個。ふ化した幼いヒナにはピジョンミルクと呼ばれる親の体内でつくった特殊な食べ物を、口移しで与えることが知られています。

トビ (タカ科)



全長はオス 60cm、メス 70cm 位。全身が茶かっ色に濁った白いまだら模様をしています。上昇気流に乗って弧をえがき、羽ばたくことなく高い空に舞い上がることができます。餌は水に浮かんだ魚や地面のネズミ、ヘビなど、主に死んだものを見つけて拾います。トビは清潔な環境を保つために大変に役立っている鳥だといえます。

カワラヒワ (アトリ科)



全長 13cm 位。スズメほどの小鳥です。尾の先のM字型、飛び立ちの翼には鮮やかな黄色い帯が目立ちます。街路樹のほか、玄関脇のちょっとした植え込みでも繁殖します。ヒナには虫のほか植物の種子も運んできます。秋になると好物の一つであるコスモスの種子に小群れでやってきて、おいしそうに食べる姿が見られます。

ムクドリ (ムクドリ科)



全長 24 cm位、周囲で普通に見られる鳥です。大きさはスズメとハトの中間ほどで、オレンジ色の口ばしが目立ちます。餌は幼虫や果物が好物で、ときに果樹農家には嫌われますが、田畑で耕運機の音がひびくとすぐ飛んできて、出てきた害虫を食べてくれます。秋から冬にかけ数百羽が電線などに飛来し、思わぬ光景に驚かされます。

セグロセキレイ (セキレイ科)



全長 21 cm位。全体が白と黒が目立つセキレイで、日本だけに棲む鳥だと言われています。川べりや湖の周辺、住宅地などにおいて、長い尾を上下に振りながら動きまわります。餌は主に小さな昆虫で地面のほか、舞い上がった虫なども巧みに捕えます。飛ぶ姿も上下に大きな波型で、「ジジッ ジジッ」と濁った声で鳴きます。

鳥のひみつ 鳥さんの歌声には意外なメカが

“ホーホケキョ” “ピーチクリピーチクリ” 春告げ鳥のウグイスとヒバリのさえずりです。この美しい鳴き声は私たち人間の発声とはかなり違った機能から発せられます。人は歌ったり話したりは息を吐くときですが、鳥は息を吸うときも吐くときも声がだせます。それは肺につながる気嚢(きのう)という数個の袋によって、呼吸するたびに空気の流れが入れ替わる仕組み、その発声は鳴管という体内の優れた楽器から生まれます。ウグイスは「ホー」で息を吸い「ホケキョ」で吐くとされ、ヒバリは何十分もさえずり続けることができるのです。



喉をふくらませて
鳴くウグイス

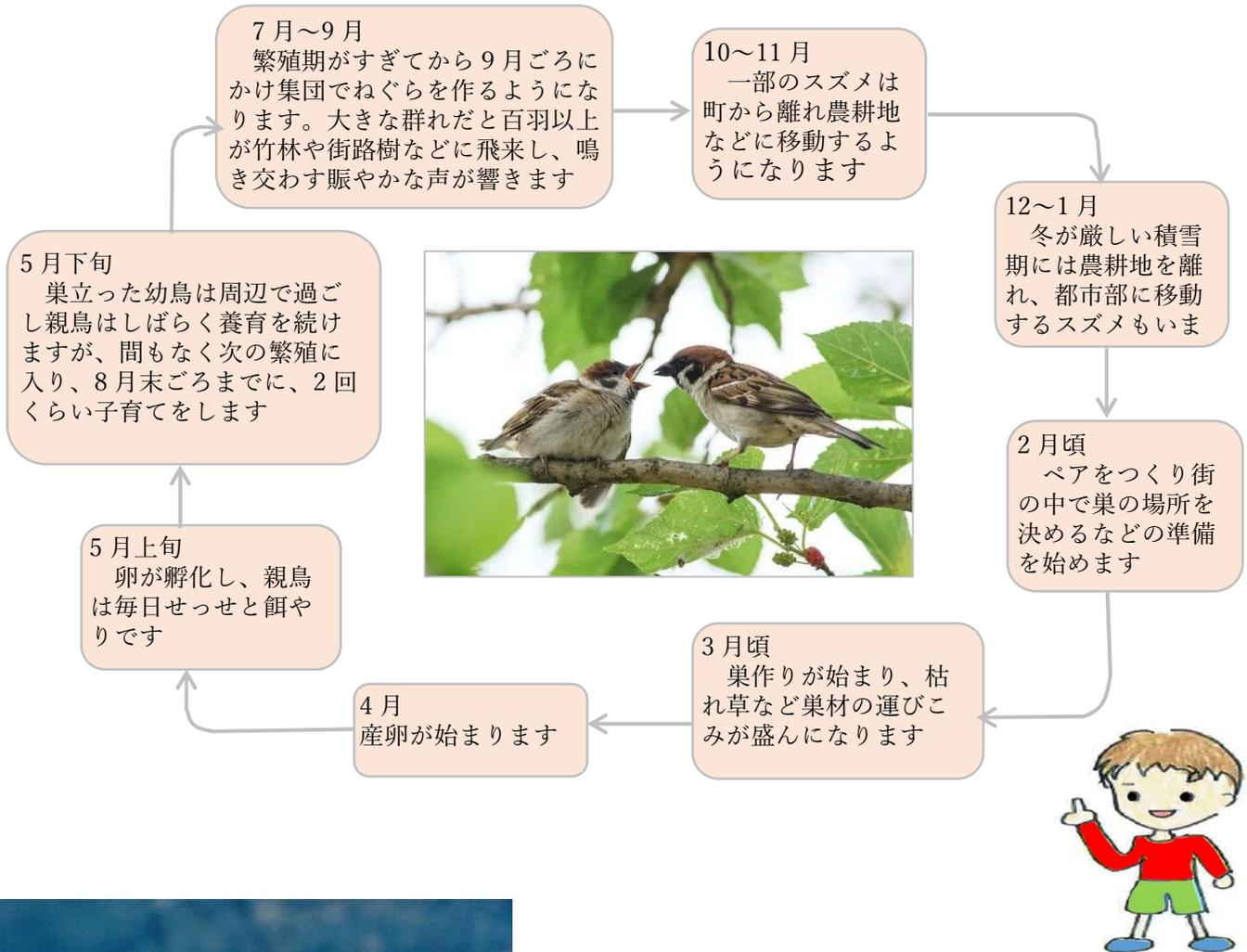


ホバリングして
鳴き続けるヒバリ

■ スズメ 人がいないと生きていけない

スズメ (スズメ科)

全長 13 cm位。スズメは最も知られた鳥です。多くの鳥が人間を避けて生活しますが、スズメは逆に人がいない環境には棲みません。長い歴史の中で人間社会になじみ、食べものや子育てに都合よいと学習したのでしょう。けれども近くで目を向けるとパッと逃げます。この鋭く反応する警戒心こそ、人の隣りで生きながらえた知恵かもしれません。



枯草に止まって休むスズメの群れ

鳥のひみつ-③ 鳥さんの歯ってどこにあるの
 鳥の食事は哺乳動物のように噛むことなく丸飲みにします。では硬いものや消化しにくい食べ物は体内でどうなるのでしょうか。実は、鳥の消化器官には「砂のう」という餌をすりつぶす丈夫で厚い筋肉の器官があります。ここが“鳥の歯”です。小石や砂が詰まった袋を食べ物が通過するときに碎かれます。大きなダチョウを解剖した際に直径 3 cmの石など 600 g もの石が出てきました。

■ カラスの子そだて

一口にカラスといってもハシボソガラスとハシブトガラスの2種類がありますが、多くの人はその違いに気付いていないようです。体はハシブトガラスの方が少し大きく、^{くちばし}嘴も太く長いこと。また声にも違いがあって、ハシボソガラスは「ガアー、ガアー」とにごった声、ハシブトガラスは「カー、カー」と明るく聞こえ、注意すれば聞き分けることができます。



冬の厳しい諏訪地方ですが、とくにハシボソガラスは雪のあるうちにもう巣作りを始めます。巣の外側には木の枝をしっかりと組み、内側はワラクズヤ動物の毛などを運び柔らかく暖かな巣を完成させますが、ときには民家の庭先からハンガーをこっそり巣に運ぶカラスもいます。以前、諏訪市湖岸通りにあった巣には、ハンガー6本が使われていました。

体の黒いカラスですが、実は卵も緑がかった黒っぽい色の卵が多く、ほかの鳥の卵とはちょっと違います。卵の数は3個から4個で、ふ化したヒナはうす青黒い肌、口の中はあざやかな赤です。裸のヒナを親鳥は辛抱よく温め、大切に育てます。餌は魚や小動物の死体、果実、残飯など雑食性です。人間社会の隣りでしたたかに生きてきたカラスは大変な知恵者で、拾った硬い殻のクルミを車道において車で割らせて食べるほか、上空からクルミを正確に道面に落とし割って食べるなど、人間がつくった環境を巧みに利用しています。



ハンガーを利用した巣

巣は木のほか電柱上にも作りますが、巣材で運んできた金ぞく類が停電事故につながるため、電力会社の係員は苦労が絶えないようです。2025年2月に中部電力諏訪営業所の担当者にお聞きしたところ「最近は少しへってきましたが、今でも諏訪地方で年間350カ所ほど電柱に巣をかけます」とのこと。カラスの巣が危険な状態かどうか双眼鏡で確かめて、問題ながければそのまま見守るそうです。

鳥のひみつ-④ カラスさんのヒナを養う小鳥さん？

写真は小さなコサメビタキが、何十倍も大きなハシボソガラスのヒナを養っている大変珍しい写真です。鳥の世界では時どき巣立った若鳥などが次に誕生したヒナに餌運びをする行動が知られています。これらはヘルパー行動と呼んでいますが、その研究は道半ばです。このコサメビタキは全く違う種類で、大きさも異なったカラスの養育を手伝った特殊な例でした。



嘴に止まり別のヒナに餌を与えるコサメビタキ

■ 知って楽しいカワセミの暮らし

○カワセミの生態

全長 17cm。くちばしは 3~4cm と体に対して長く、魚捕りにすぐれた鳥です。種としては世界に広く分布し、日本では、標高 900m 程度までの山地の川や湖沼、都市公園の池などでも見ることができます。チーという鳴き声とともに鮮やかな^{ひすいいろ}翡翠色の姿が一直線に飛ぶ姿が目につきますが、水辺に張り出したヤナギやヨシ、ちょっとした杭などをよく探してみると、そっと止まって水面を^{ねら}狙っている姿を見つけることができます。

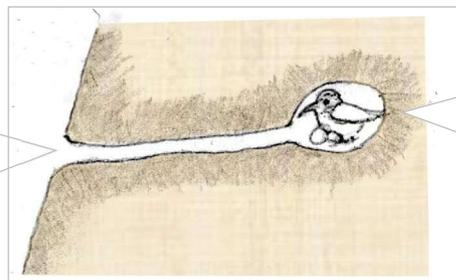


餌を狙っているカワセミ

○巣づくり

土が露出した崖の上部に、くちばしと足指を器用に使ってトンネルのような穴を掘って巣とし、奥の^{さんしつ}産室に卵を産んでヒナを育てます。

穴は縦長で、大きさは縦が 6~9 cm、幅は 4~5 cm ほど。巣の出入り時に足指をかけるため、穴の下縁にくぼみができます。



穴の長さは 50~80 cm ほど。その先に少し広がった産室があり、魚の骨が敷いてあります。

河川の崖に作られたカワセミの巣

一回の繁殖で 6~7 個の白い色の卵を産み、卵が孵化するまで約 20 日間は雄雌交代で抱卵します。孵化してから 14 日くらいまでは親がヒナに与える回数は増えていきますが、その後は減っていき、22 日~27 日くらいで巣立ちを迎えます。この頃には、親鳥は魚をくわえて巣穴の前に来てもヒナに与えず、巣の外に出てくることを^{うなが}促します。巣立ちは、捕食者の活動が活発でない早朝に行われることが多いようです。

○カワセミの名前の由来

カワセミの名前の由来には諸説あり、一説には、カワセミははるか昔にソニやソビと呼ばれていて、古事記に出てくるソニドリはカワセミのことだとされています。その呼び方が長い歴史の中で、ソビ→セビ→セミ、もしくはソビ→ショウビンと変化したとされ、セミもショウビンも、同じカワセミの仲間を意味していると考えられます。また、背が美しいことから、川背美とされたという説もあります。

○カワセミが好む諏訪湖周辺の環境

諏訪湖畔や上川、天竜川などでヤナギやヨシのある^{やぶち}藪地で、陸側からの見通しがあまりよくない場所を選ぶようです。上川の新六斗橋~高野橋間、岡谷駅裏に近い天竜川沿いなど出現する頻度が多いようです。

■ 南の国から渡ってきた夏鳥たち

春に東南アジアなどから日本へ渡ってきて子育てをし、秋に南の国へ帰っていく鳥を「夏鳥」と呼んでいます。主に北半球で見られる鳥たちですが、諏訪湖の周辺ではオオヨシキリや、もっと大きいヨシゴイなどが、自然の残る水辺に入り、縄張りをつくって繁殖します。餌がいちばん豊富な季節に合わせて子育てし子孫をつないでいます。



夏鳥たちの飛来コース

ヨシゴイ (サギ科)



35cm 位。ヨシゴイは日本にいるサギの仲間では一番小さく、名前のようにヨシ原がある場所だけを選んで棲む鳥です。長い足が目立つサギ類ですが、ヨシゴイの足は短め、逆に指は長く浮いた葉の上を歩くことができ小魚やカエル、虫などを食べます。ヨシゴイは激減し、県内でも諏訪湖が貴重な場所になってしまいました。

オオヨシキリ (ヨシキリ科)



体長 18 cm位。ヨシ原に棲む目立たない鳥ですが、さえずりは、「ケケス、ケケス、カイカイシツ」と大変にぎやか。南方からの飛来は、諏訪湖のヨシがまだ伸びきれず、青葉と冬枯れの二層になり始めころ。2、3本のヨシの茎に深いコップ状の巣をかけます。オオヨシキリは1羽のオスに数羽のメス、一夫多妻の鳥でも知られています。このオオヨシキリの巣にはカッコウが托卵することで知られています。諏訪市の諏訪湖岸では以前に水面に落ちたカッコウのヒナを助けようとするオオヨシキリの懸命な姿がありました。



ヨシ原に同化したヨシゴイ

鳥のひみつ-⑤

ヨシゴイさんは忍者！

ヨシ原で生活するヨシゴイは身の守りかたの一つに、忍者まがいの“ヨシ化け”があります。危険を感じると、体をスーと伸ばしヨシ原に同化させます。風でヨシがなびくと体を揺らすことさえあります。

カッコウ (カッコウ科)



全長 35 cm位。よく知られた夏の鳥で「カッコウが鳴いたで豆をまけ！」と言われるように、カッコウの訪れは霜の季節の終わりを意味します。子育てに飛来するのに、自分では育てずにセキレイ、モズ、ノビタキ、ヨシキリなどの巣に卵を1個うみこみ、仮親によってヒナは育ちます。好物は大きな毛虫類で、樹木の大敵を食べてくれます。

コチドリ (チドリ科)



全長 16 cm位。足が黄色で目の周りの黄色も目立ちます。春に東南アジア方面から飛来して川原などに巣とは思えない巣をつくり卵を温めます。地上で育つヒナは危険が迫ると石ころのように体を地面にふせ、親鳥は怪我をしたふりをして注目させ、ヒナから離れた場所に敵を移動させます。秋には南の国へ旅立っていきます。



国鳥にふさわしい姿のキジのオス



キジのメス

鳥のひみつ-⑥ 国鳥のキジさん、母親の壮絶な愛

キジは日本の「国鳥」です。照り輝くような美しい雄、優しい雌の姿はまさに象徴的、人里近くに棲むので目にする機会が多い鳥ですが、意外に知られていないのが雌の並外れた母性愛でしょう。「焼野のキギス、夜の鶴」ということわざがあり、キギスとはキジの古名です。野火の危険がせまっても逃げずに卵や子を守るほど強い鳥だといいますが、実例もあるそうです。筆者が見た同様の例では、草刈り作業中に誤って抱卵中の母鳥に回転刃を当ててしまい即死でした。同じ事故は諏訪地方に何例もあります。この命をはった母鳥のすさまじい愛情こそ、国鳥として誇れる真の姿かもしれません。

■ 身近な渡り鳥 ツバメを観察してみよう

ツバメとイワツバメ（ツバメ科）

普通に見られる夏鳥ですが、夏鳥の中でも諏訪地方で一番早く目にするのがイワツバメで、冬の寒い諏訪地方でも3月下旬にはもう姿が見られます。一步遅れて4月の初めにツバメを見ることができます。

イワツバメはツバメより尾が短く、少し小さく見えます。白い腰がツバメとの識別点になるほか、足指まで羽毛が生えています。この2種類のツバメは人間社会にとけ込んで、人家や交番、駅などにツバメが、またビルやダム、立体駐車場などにイワツバメが巣作りする傾向があります。巣の材料の大半が泥でこれは2種類とも同じですが、巣の形は大きく違い、ツバメはお椀型であるのにイワツバメはつぼ型です。深いつぼ型の巣には、鳥の羽やワラくずなどを運び暖かく作ります。また一戸建てのようなツバメに対し、イワツバメはアパート形式で集団で繁殖する傾向があります。同じツバメ科でも暮らし方はずいぶん違います。

子育てが終わりに近い夏、ツバメは群れとなり、ねぐらに集まって眠ります。岡谷市川岸橋原の天竜川では2021年と22年に、岸辺のヤナギに毎晩800羽ものツバメが飛来しました。ねぐらに突入するダイナミックな飛行と、寝静まるまでのにぎやかな鳴き交わしは圧巻でした。

春渡ってくるツバメやイワツバメの多くは前年の巣を使って繁殖をします。その巣は入口や外壁の補修から始まり、泥地で集めた泥を練って左官屋さんのように上手に上塗りします。近年は砂まじりの泥で巣作りすることもあるため、巣が落下する事故が目立ちます。粘りがある上質の泥集めは大変そうです。

○諏訪地方で初、ツバメが越年

2024年12月13日のこと、諏訪湖の釜口水門から流れ出た天竜川の上をスイスイ飛ぶツバメが観察されました。このツバメは2025年1月31日まで4回もほぼ同じ場所で目撃され無事越年しました。諏訪地方では初の記録と思われますが、7期連続の御神渡りがない諏訪湖周辺の冬のツバメは、地球の温暖化に関係しているのでしょうか。



ツバメ



イワツバメ



巣立ち目前のツバメのヒナたち



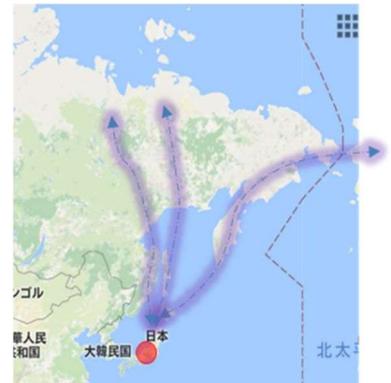
イワツバメの巣



天竜川にあったツバメのねぐら

■ 北の国から渡ってきた冬鳥たち

北国で子育てを終えた鳥たちが、きびしい冬の季節をのがれて日本ですごし、春に北へ帰っていく鳥を「冬鳥」と呼んでいます。ですから日本で繁殖することはほとんどありません。タヒバリのような小さな鳥からハクチョウのように大型の鳥まで様々な冬鳥が集まり、諏訪湖は一年中で最も命の輝^{かがや}きを感じられる季節となります。



ハクチョウ類の飛来コース

コハクチョウ（カモ科）

諏訪湖にやってくる「冬の使者」コハクチョウは、とても遠い所から飛んできます。その場所はシベリアです、それも北極海に近い最も北のほうで、どこまでも続く湿った草原がふるさと、諏訪湖からは4,000kmも離れています。

ハクチョウが初めて諏訪湖にきたのが昭和49年(1974)のことでした、オオハクチョウより少し小さなコハクチョウ2羽で「すわお」「すわこ」と呼ばれた鳥です。この大きくて優雅な鳥を大切に見まもり増やそうと、諏訪湖白鳥の会がつくられ活動がはじまりました。これには県も協力してハクチョウがくる岡谷市横河川の出先に羽を休める島をつくったり、好物のマコモという水辺の草を植えたりしました。飛んでくる数もしだいに増えて、昭和61年(1986)には初めて106羽と3ケタになり、さらに平成17年(2005)には大雪など、ほかの場所からやってきたのか656羽にもなり、大勢の白鳥ファンを喜ばせました。このところ諏訪湖にやってくるコハクチョウの数はあまり多くありません。豊富な餌場で安心して過ごせるよう、見守りたいです。

○コハクチョウの繁殖地はシベリア北部



ツンドラの大地で抱卵(ほうらん)するコハクチョウ、この写真は、桑本和一さん(下諏訪町)がロシアの鳥類研究者と現地に行き撮影した貴重な一枚です。

○シベリアからの飛来も命がけ



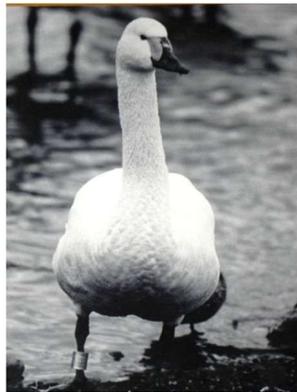
北帰行の直後に岡谷市内で高圧線に当たって落ちたコハクチョウ

○「のりこ」の偉業^{いぎょう}

諏訪湖には、全国のハクチョウ研究者に知られた「のりこ」と呼ばれたコハクチョウがいました。1990年のことです、地球環境を調べる国の仕事として、白鳥が渡っていく道すじや子育ての場所を科学的に調べようと、北海道の最も北、クッチャロ湖で北に帰る4羽のコハクチョウを捕まえました。その足に番号がついた足環のほか、背中には電波を地上で受けてハクチョウの動きがわかる発信機(2カ月で外れます)をつけて放しました。

次の年の冬、諏訪湖で足環^{あしわ}がついたコハクチョウが見つかりました。諏訪湖白鳥の会の人とその番号を写真に撮って、千葉県にある山階鳥類研究所に送ったところ、クッチャロ湖で「のりこ」と名付けられ放された鳥であることが分かりました。しかも放した4羽のうち、シベリアのツンドラ地帯まで電波を送り続けたのは「のりこ」だけでした。「のりこ」が舞い降りたその場所は、

北緯 68, 6 度、クッチャロ湖から 3,083 km も離れた最果ての地、北極海にそそぐコリマ川のほとりで、ここが子育ての場所だったのです。日本には約 4 万羽のコハクチョウがやってきますが、そのふるさとの場所



コハクチョウ「のりこ」

を科学的に教えてくれたたった 1 羽の鳥。「のりこ」はまさに奇跡の鳥となりました。

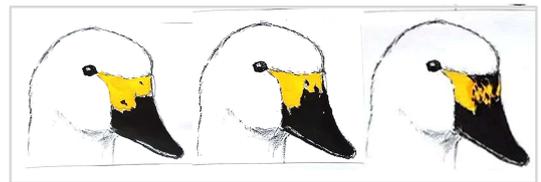
○「のりこ」には別の「男名」があった!

諏訪湖に来ていた一羽のコハクチョウの嘴には、正面の上方に黄色くボケただ円形^{とくちょう}がありました。その特徴からこの鳥に「ぼけまる」の愛称が付けられたので

す。ハクチョウ類は外見上からは性別が見分けできません。

この「ぼけまる」は諏訪湖白鳥の会の会員や、多くの自鳥ファンに見守られながら諏訪湖に飛来し続けていました。一躍脚光^{いちゃく}を浴びたのは平成 3 年(1991)の飛来でした。「ぼけまる」の足に足環がついていたのです。これが前年にクッチャロ湖で研究者に捕獲された「のりこ」でした。捕獲時には性別が調べられ雌の個体と判明、放鳥の際に背中に発信機^{きやっこう}が糊づけされたので「のりこ」と命名されたのでした。

○ハクチョウのクチバシの黒い模様は皆異なります。



コハクチョウは鳥の中でも 1 羽ごとの識別が可能な鳥で知られています。嘴にある鮮やかな黄色と黒色の模様が個体ごとに違うため、この部分を注意してみるのがポイントです。特徴的な模様を見つけたらハクチョウに愛称をつけて毎年飛来するかを調べると興味が深まります。

ユリカモメ (カモメ科)



ユリカモメは冬鳥として日本に飛来します。諏訪湖では毎年、短期滞在者として湖上を飛ぶ姿が見られます。

■ 諏訪湖にやって来るカモの仲間

コガモ (カモ科)



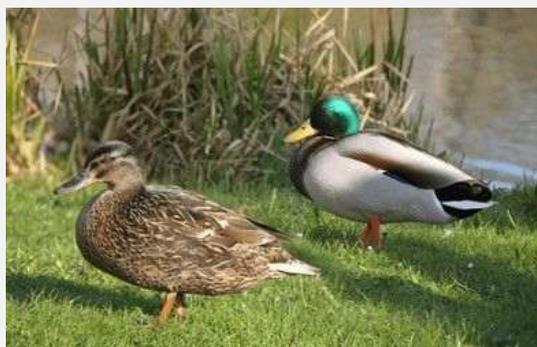
全長 35 cm位。漢字では「子鴨」でなく「小鴨」と書くように、日本にくるカモのなかで最も小さな種類です。オスの色はカラフルで声はピリッピリッとソプラノ調。逆にメスは地味でグェ、グェとバリトン調、声だけで区別がつけます。主に水草や藻などを食べて過ごし、冬が終わる3月ごろペアとなって繁殖地の北国へ飛び立っていきます。

カワアイサ (カモ科)



全長 65 cm位。浮かんだ姿は横長に見えます。日本での越冬は主に湖や川などで過ごします。魚を主食にしている細いくちばしの上には、のこぎり状のギザギザがあり、この道具をつかい巧みに魚をとらえます。諏訪湖では沖あいの水面で列をつくったカワアイサの群れが、いっせいに潜って餌をもとめる姿があります。

マガモ (カモ科)



全長 60 cm位。雄の頭はつやのある緑色で目立ちます。多くは北国からやってきますが、本州中部でもわずかに繁殖をしています。潜ることができないカモなので、水中の餌探しは水面で逆立ちとなります。人に飼われているアヒルはこのマガモが祖先。改良が重ねられ、肉や卵など人の暮らしに大きく貢献する今の姿になりました。

マガン (カモ科)



全長は 70 cm位。ハクチョウとカモの間ほどの鳥です。アラスカやロシアなどで子育てをして冬に日本へやってきます。代表的な場所である宮城県の伊豆沼は、数万羽ものマガンが群れます。諏訪湖には数年おきくらいに少数がやってきます。地味な色あいですが、その姿は美しく気品さえ感じられます。

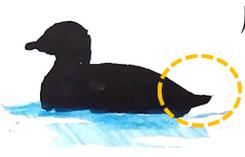
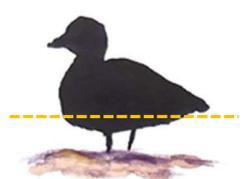
■ 諏訪湖にやって来るカモの見分け方

諏訪湖ではたくさんのカモ科の鳥が観察され、その数は 30 種以上にもなります。県内で最も大きな湖の諏訪湖は比較的^{かんさつ}に水深が浅く動植物の生育に適し、自然条件としてはカモ類は棲みやすいといえます。

カモ科は大きく分けて二つのグループがあります。一つは地上や水面で餌を探すカモで主に植物が主食です。もう一方は水中に潜るカモで、こちらは魚や貝、藻などを食べます。この二つのグループの見分け方を図で示しました。注目する点は「体の形」と「行動」のちがいです。



諏訪湖にやってきたカモたち

場 所	水面採餌性(陸と水面で餌をとる)	潜水採餌性 (潜って餌をとる)
鳥の名称	カルガモ、マガモ、コガモ、 トモエガモ、ヨシガモ、 ヒドリガモ、オナガカモ、 シマアジ、ハシビロガモ	ホシハジロ、キンクロハジロ、 スズガモ、ホオジロガモ、 カワアイサ、ミコアイサ
① 水上	 尾が上がっている	 水に浮いている 時は尾先が見え にくい
② 立ち姿	 体は水平に近い	 立ち上がっている
③ 潜る姿	 倒立型	 潜ることができる
④ 水上からの 飛び立ち	 水面から直に飛 び立つ	 水面を数歩滑走 して飛び立つ

■ 諏訪湖を中継地とする旅鳥たち

○ 砥川の河口は旅鳥の中継地

遠い南の国と繁殖地である北の国を行き来し、旅の途中で立ち寄っていく鳥を「旅鳥」といいます。日本では主にシギやチドリの仲間たちで、諏訪湖では砥川の河口にある砂州が羽を休め餌を補給する大切な場所。水がひたひたする浅瀬があつての飛来です。

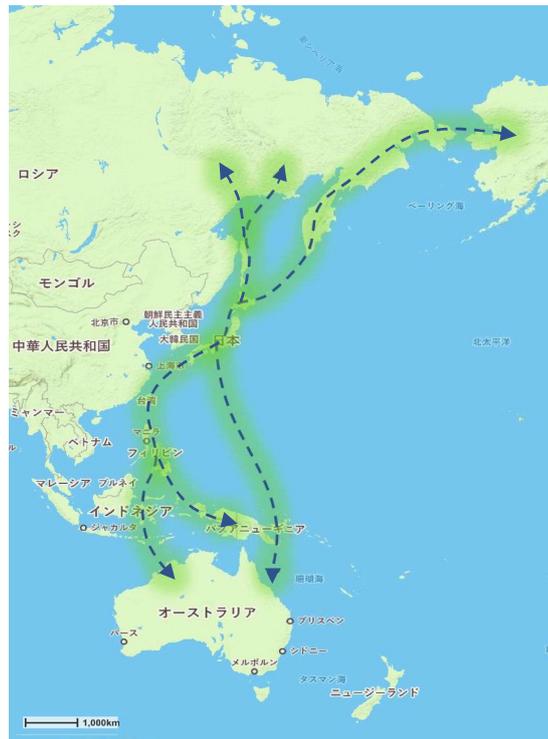
春と秋の2回観察されオーストラリアやニュージーランドなどからシベリアやアラスカまで、地球規模で飛び続ける空の旅人に会える貴重な場所です。



砂浜が広がる砥川河口、その先に見えるのはカワウ



砥川の河口にできた砂洲を上空から
洲の大きさは約 200m 四方でその形は釜口水門
の方に向かっていています。



←- - -> 旅鳥のコース



湿地に生きる長距離旅行者のムナグロ（チドリ科）

鳥のひみつ-⑦

何を目印に鳥さんは飛ぶの

海を越えて移動する鳥たちは、人の想像をはるかに超えた超能力者です。体内磁石（磁覚）をつかって自分が飛ぶ方向を定めたり、夜には星を見て位置情報を得ているそうです。何回も渡りを経験した鳥は山や川、海岸線など記憶による行動をするなど、その能力には頭が下がります。

セイタカシギ (セイタカシギ科)



全長 35 cm位。細い嘴、スマートな体、並みはずれた長い足。一度見たら忘れられない姿、諏訪湖にはこんなにエレガントな鳥も立ち寄ります。この鳥の餌場は陸ではなく、深い水辺でもありません。ひたひたと水がかぶっているような浅瀬です。そんな環境でないと生きられません。日本では一部で繁殖が記録されています。

トウネン (シギ科)



全長 15 cm位。スズメほどしかない小型のかわいいシギで、注意すれば見るチャンスにめぐまれます。干潟などではかなりの群できますが、諏訪湖周辺では1羽から数羽が、とくに秋の渡りに観察されます。ちょっと変わった名前ですが、「その年(当年)に生まれた子どものように小さい」ことを感じさせるとして付けられた種名です。

キアシシギ (シギ科)



全長 25 cm位。名前のように黄色い足のシギです。諏訪湖の岸辺のほか釜口水門下のななめの護岸や、上川の河原などでときおり見かけ、数は少ないですが夏から秋にかけて、かなり長く出会えるチャンスがあります。水辺にすむ虫やカニなどを食べています。飛びながらピューピューと澄んだ声で鳴きます。

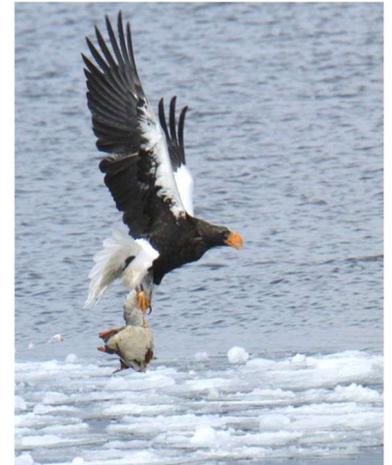
オオソリハシシギ (シギ科)



全長 40 cm位。このシギの特長は、長いくちばしが上側に曲がっていることです。これを砂や泥にさして小動物をつかまえますが、食べ物かどうか分かるほど敏感です。またこの嘴は下の方にも曲がり、まさに有能な道具です。すばらしい飛行家で北国から1万キロ以上をほとんど休まずに南国まで飛んだ記録があるそうです。

■ 感動を残したオオワシ「グル」

オオワシはロシアから冬日本に飛んでくる巨大なワシです。諏訪湖では古くから時どき来ていましたが、一気に知られるようになったのは平成8年（1996）に飛来し、のちに「グル」と呼ばれたオオワシです。その4年後、なんと諏訪湖で弱っているのが見付き救助されたのです。それからひと月半、懸命な手当てをうけて回復したグルはふたたび大空に帰っていきました。その翌年、助けてもらった恩を返すかのようにグルが飛来したのです。その勇壮な姿は多くの人に勇気を与えました。そして初飛来から23年間、休むことなく諏訪湖に舞い戻ったグルでしたが平成30年（2018）3月に北へ旅立ったのが最後の姿となりました、感動とともに今なお語り草になっています。



獲物をつかみ諏訪湖の上を飛ぶグル

おおわしグルの年譜				
和 暦	西 暦	年 齢	御 渡 り	内 容
● 平成8年	1996	1		1月9日 諏訪湖に初めてやって来たことが確認される
● 平成10年	1998	3	○	
● 平成11年	1999	4		1月4日 衰弱して諏訪湖に落ちていたところを助けられる 2月21日 諏訪市豊田の田園地帯で放鳥（ほうちょう）
● 平成12年	2000	5		1月28日 飛来を確認
● 平成15年	2003	8	○	
● 平成16年	2004	9	○	
● 平成18年	2006	11	○	おおわしの幼鳥1羽が飛来
● 平成19年	2007	12		朝日小学生新聞（2月4日発行）のマンガにグルが登場
● 平成20年	2008	13	○	おおわしの幼鳥1羽が飛来
● 平成21年	2009	14		助けられて10年目の年 オオワシ回帰展、講演会など開催
● 平成22年	2010	15		大和砂防えん堤工事グルに配慮し着工延期（1月15日新聞掲載） 高林君作成おおわしグルの彫刻が「コンクール」で金賞受賞
● 平成24年	2012	17	○	中部電力が高木-上諏訪間の高架の感電防止
● 平成25年	2013	18	○	
● 平成26年	2014	19		諏訪湖にオジロワシがやって来たがグルは排撃（はいげき）
● 平成27年	2015	20		成人した神明小卒業生（グルと同じ年）10年ぶり観察会
● 平成30年	2018	23	○	御渡り発生 3月3日北帰行（最後）
● 平成31年	2019	24		その後姿見せず



えつとうち オオワシの越冬地

はんしよくち 繁殖地

オオワシってどんな鳥？

- 【形態】 雄は全長 90cm 位、雌は 100cm 位。翼を開くと 2m50 cm ちかく、体重は 5 kg から 8kg もあり、くちばしと足はオレンジ色です。
- 【分布】 夏の間はロシア東の海に近い森林でヒナを育てます。冬には過ごしやすい場所を求め南下し、日本のほか朝鮮半島などにも渡ります。
- 【生態】 海岸や湖、川の近くに棲み主に魚を捕えるほか、鳥や死んだ動物なども食べます。狩りは、木や岩場の見晴らしがいい場所で待ち伏せしたり、上空で獲物を探したりして、見つけると急降下して鋭い爪で捕えます。
- 【保護】 昭和 45 年（1970）には国の天然記念物に指定されました。

■今なお愛されている塩嶺小鳥バス

岡谷から塩尻に向かう途中にある塩尻峠、一般に塩嶺と呼ばれています。ここの森は昔から多くの小鳥が集まる所でした。その峠に向けて「小鳥バス」が走ったのは今から 70 年以上も前、戦後まもない昭和 29 年（1959）のことです。鳥が好き、自然が好きという仲間の諏訪探鳥会（今の日本野鳥の会諏訪支部）の会長を務めていた小平万栄さんが「塩嶺で『小鳥バス』をやりましょう」と提案しました。

小平万栄さんは茅野市出身で、小鳥に詳しい学校の先生でした。岡谷市やバス会社の協力によって実現。その最初の日は何と参加者が 5、6 人でした。がっかりしながらも頑張り、小平さんは野鳥の楽しさや自然の素晴らしさをユーモアを交えて案内し続けました。やがてバス 2 台でも乗り切れないほど参加するようになり、塩嶺の森は県の「小鳥の森」に指定され、小鳥がさえずる森は環境省の「日本の音風景百選」の地にもなりました。この事業は 25 回目から岡谷市の運営になり今も走り続けています。案内人も変わりましたが、多くの根強い小鳥バスファンに支えられています。



小鳥バスワッペン



美しい小鳥のさえずりに耳を傾ける参加者

小鳥バスの歴史

昭和 29 年 諏訪探鳥会（今の日本野鳥の会諏訪支部）の会長、小平万栄さんの呼びかけで始まる

昭和 38 年 10 周年記念で中西悟堂の歌碑が建立される

昭和 44 年 小鳥バスの愛唱歌「小鳥バスのうた」が完成。

作詞は鈴木敏史氏、作曲は磯部俣氏

昭和 54 年 25 周年を機に岡谷市に事業が移管される

平成 28 年 60 周年記念で日本野鳥の会諏訪支部で中西悟堂歌碑記念プレート建立



小鳥バスのうた発表会の様子

【小鳥バス】毎年 5 月の毎週日曜に運行され、上諏訪駅西口発で下諏訪、岡谷の指定経路のバス停で待つ参加者を乗せて小鳥の森に向かう。探鳥会をしたあと同じ経路で戻ります。詳しいお問い合わせは **岡谷市商業観光課、電話 0266-23-4811（内線：1454・1456）** まで。

■ 野鳥を観察に出かけよう

これがあれば観察は楽しい！

観察に必要なもの

- ・ 双眼鏡
- ・ 野鳥図鑑
- ・ ノート
- ・ 筆記用具



バードウォッチングに必要な双眼鏡と図鑑とは

・ 双眼鏡

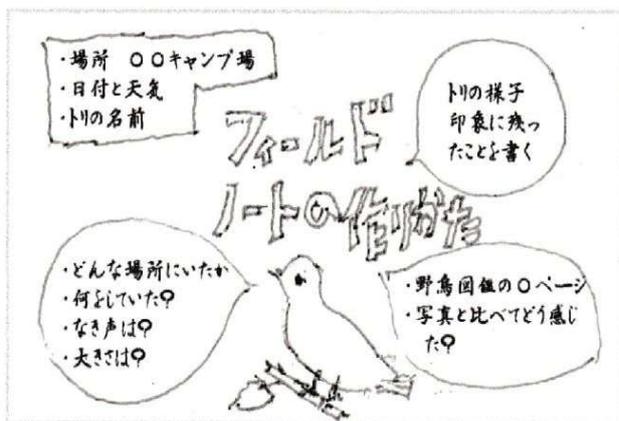
初心者であれば倍率は6倍から8倍位がおすすめです。それは鳥を見つけやすく、しかも鳥の動きに合わせて追えるからです。倍率が大きい双眼鏡は、確かに大きく見えますが、視野が狭いため鳥を見つけずらく、またわずかな手ぶれで鳥を見失しないます。レンズの口径（直径のこと）は大きいほど光を取り入れ明るく見えますが、重くもなります。買う前にためして自分に合ったものを選びましょう。

・ 野鳥図鑑

野鳥図鑑は日本にいる全種類をのせた図鑑もありますが、厚いため屋外では扱いづらい点があります。まずは目的地に行って使い分けできるように「山の鳥」、「水辺の鳥」などコンパクトな図鑑を用意すると良いでしょう。

・ 野鳥の^{かんさつ}観察ノート

バードウォッチングのほか、散歩のときも**双眼鏡、図鑑とともにノート**（小形が良い）があれば便利です。鳥を見つけたら簡単な姿をノートに**描きます**。鳥の特長（口ばしが太い、尾が短い、頭が黒い・・・）などメモします。日時や天候、見つけた場所（公園、キャンプ場、溜め池など）を記録すれば、あとで大変役立ち、鳥の早分かりノートにもなって楽しみが広がります。



探すポイント

- ◇ 耳を澄ませて
 - ・ 鳴き声は鳥がいる確かな証拠（急いで近づかず双眼鏡で探しましょう）
- ◇ 風景全体を見ずに特定な場所に注目（空の動き、木のとっぺん、建物の屋根、電柱の上、川の石の上、水面の動きなど）

観察のポイント

- ◇ 体の部分に注目を（大きさと体形は、頭部の目立つ模様や色彩はないか、嘴の形や長さ、翼の模様、尾の長さや振り方、足の長さ、など）

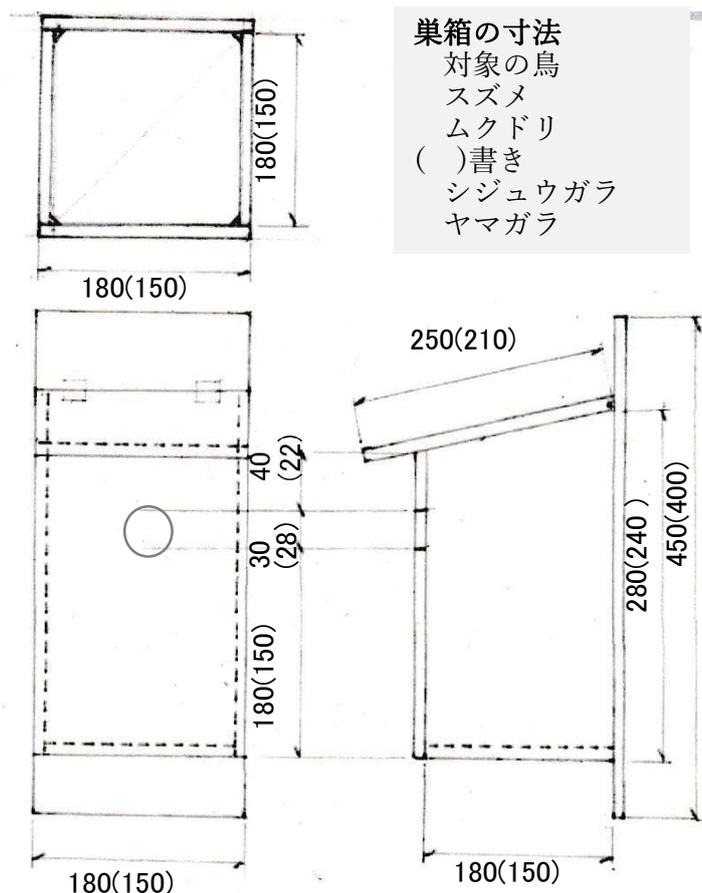
■ 身近な環境に巣箱を掛けよう

○巣箱かけのポイント

巣箱を利用して子育てする鳥は、木の穴や建物のすき間などに巣をかける鳥たちです。スズメのほか山が近ければシジュウカラやヤマガラも巣箱を利用します。林にかければヒガラも入り、さらにヤマネなど小動物が利用することさえあります。家の周りに巣箱をかけて観察してみましょう。



クヌギの木に取り付けた巣箱



○巣箱かけの心得

1) 設置時期

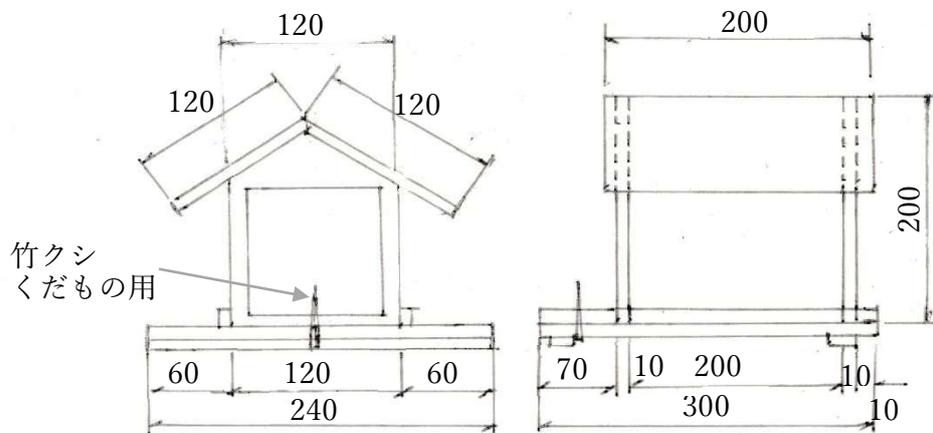
- ・時期は秋ごろが良い（子育てが終え、次のシーズン前だから）

2) 設置場所

- ・設置の高さは（種類によっても違いますが地上 2.5m から 4m 位でしょう）
- ・取り付けは幹に（枝の上はほかの動物をまねく危険が高いです）
- ・巣箱は必ず固定を（木の保護に針金でなく、シュロ縄などを使いましょう）
- ・巣箱前の止まり木は不要（親鳥は安全を確かめて一気に飛び込みます）
- ・穴の面は北や東向きが理想（箱の中が明るすぎず安心できます）
- ・巣箱はやや下向きが理想（巣箱に雨が入りにくいです）
- ・複数かける時は 10 m 以上離す（近すぎると同時使用はない）
- ・使用中は不用に近寄る、中を見るなどは禁物（中断する危険があります）

■ 餌台の作り方とその心得

鳥は種類ごと好みの環境で餌を見つけて生活していますが、食べ物が少ない冬は、生きのびるのに必死です。そんな時期にあわせて餌不足を補ってあげるのが本来の餌台の使い方です。そこに置く餌によっては様々な鳥が集まり、楽しむことができます。餌台を利用する鳥は小鳥が中心ですが、時にはカラスや小型のタカがくることもあります。では安全な餌台とはなんでしょう、小鳥が入りやすく逃げやすいことです。できるだけ周囲が開けて、ネコなど危険な動物の接近が分かるような場所を選びます。小鳥たちはたえず外敵にねらわれるので、餌台までの高さは地上1.5mくらいは必要です。また支柱には動物の爪が掛からないよう、塩ビやトタン板を巻けばより安全になります。かわいく美しい小鳥たちの食事風景を楽しみましょう。



エサ台の寸法図



庭に設置しました



スズメたちはみんなで仲良く
食べます

【餌の内容と集まる小鳥】

- ・米、アワ、ヒエ、パンくず（スズメ、カワラヒワ、ヒヨドリ、など）
- ・ヒマワリ、麻の実、ピーナッツ（シジュウカラ、ヤマガラ、イカル、など）
- ・ミカン、リンゴ、カキ（メジロ、ヒヨドリ、ムクドリ、オナガ、など）
- ・牛脂、肉片など（シジュウカラ、ヤマガラ、アカゲラ、など）

【参考文献】

- 「諏訪湖 治水の歴史」諏訪建設事務所（1998年）
「諏訪湖創生ビジョン」諏訪地域振興局（2023年）
「アーバンクボタ no36（特集・諏訪湖）」（株）クボタ（1997年）
「渋のエゴ調査報告書」諏訪市教育委員会（1973年）
「探鳥・渋のエゴ特集」日本野鳥の会諏訪支部（1975年）
記念誌「時の飛翔」日本野鳥の会諏訪（2011年）
長期連載「諏訪湖特集・鳥たち」市民新聞（1982年）
「鳥の雑学辞典」（財）山階鳥類研究所（2004年）
「知って楽しいカワセミの暮らし」笠原里恵著（2023年）
「鳥類学が教えてくれる鳥の秘密事典」陳湘静、林大利 共著（2023年）
「日本のカラス」松原始著（2018年）
「ツバメの謎」北村亘著（2015年）

【協力団体】

日本野鳥の会諏訪支部

事務局 富士見町立沢 5311-1 西 教生 電話：070-8499-7321

URL: <https://www.wbsuwa.org/> Mail: shibu@wbsuwa.org

【写真提供】

諏訪建設事務所、阿部正則、桑本和一、中島忍、林正敏、林昌宏、宮澤富幸、八幡義雄

諏訪湖の鳥、周辺の鳥
(非売品)
発行 令和7年 3月
諏訪湖クラブ事務局
住所；392-0017 諏訪市城南二丁目 2362
TEL/FAX 0266-58-0490
E-mail e-suwa-info@lake.gr.jp
<https://suwako-club.com/about.html>
編集 林 正敏
発行に当たっては「長野県地域発 元気づくり支援金」の
補助を受けています

学校 年 組
なまえ